毎日歌壇

加藤　治郎　選

風に散るさくらよさくらさらさらになんにん死ねば戦争は止む　春日部市　宮代　康志

〈評〉ボブ・ディランの「風に吹かれて」を踏まえている。辛辣だが桜をモチーフにすることで日本の情緒になじんでいる。

米買えずオートミールを食べながら政権交代する我が体　広島市　堀　眞希

〈評〉わが内なる政権交代だ。米の時代は終わった。悲痛だがユーモラスである。

通過するホームの人はそれぞれの通過できない何かをかかえ　狭山市　りんか

タルト、という音の軽さよ　改札を抜けた先にてきみが手をふる　所沢市　神田　望

優しさに応えられない悔しさのまま煮魚を煮続けていた　広島市　宮田　実来

プールの後みたいにだるい八月の塩素の匂いだけが恋しい　長岡市　三月　とあ

終電で睫毛に光を乗せているおまえらみんなさよならの子ども　東京境　千尋

君のいない街の小さなベランダでとにかく愛して欲しいと思う　名古屋市　森本　有

おにぎりが海苔を脱いだらパンだったようにヨウコはもう高校生　枚方市　坊　真由美

一キロもない散歩道桜道たくさん咲いてたくさん散った　姫路市　田辺富士雄

水原　紫苑　選

坂道を転がっていく林檎には「とどまる」という概念がない　札幌市　橘　晃弘

〈評〉一首の文体そのものが、坂道をころがるリンゴのように、とどまるという概念を持たずにまっすぐに流れていく。

地球が速く回ったのかも天気予報よりも早く雨が降ってくる　甲府市　村田　一広

〈評〉地球も気分次第で動いているのだろうか。いつか証明されるかもしれない秘密。

パンジーのうつむく夜をトランプの兵士は二度と立ち上がれない　加古川市　石村　まい

アリア　もし今のあなたがひとりなら確かさでできた楽譜をあげる　鶴岡市　鳥井　景

泥団子うまく作れず気がつけば家族のように私を囲む　横浜市　砂月　七

一心に眩しい庭よ　母の食む草の名前を忘れてしまった　東京境　千尋

火葬とはゆるされること　ゆうぐれにりんねりんねと鳴る鈴を割る　宮古島市　塩見　佯

はつなつの畦道ゆけばどこまでもみづぴたしなるあをぞらひかる　見附市　有村　桔梗

雨粒は迷子になっていくでしょう林檎の皮がほどけるように　岡山市　松井　度

納豆を混ぜずに食べる玄関で靴も脱がずに抱き合うように　松原市　たろりずむ

伊藤　一彦　選

たっぷりと青竹色を吸ひ上げる万年筆のやうな深呼吸　横浜市　谷口　菜月

〈評〉今は美しい新緑の季節。木々の間を歩きたくなるが、この歌「万年筆」の比喩が新鮮でユニーク。「青竹色」が特にいい。

夕暮れを飲み干すことはできません葡萄酒色にふくらむ日照雨　国分寺市　青野　暦

〈評〉日照雨が「葡萄酒色にふくらむ」の表現が巧み。この句を見事に生かす。

何処かに光を灯す細き紐下がるを信じ闇に手探る　富士見市　松本　尚樹

野良猫のまるに信頼されたこと何より尊い私の誇り　春日市　伊藤　亮

少しずつ音色を変えてゆく木々のさみどりいまは風の交歓　東京　富見井高志

人名のときにはみのりと読むといふ農といふ字は奥行き深し　いわき市　吉田　健一

これもまた差別だろうか少しでも綺麗な方を手に取るバナナ　札幌市　住吉和歌子

帰らざるものおもうとき初夏の海はもっともさびしく光る　垂水市　岩元　秀人

子が親を、孫が祖父母を、という話淡々と告ぐニュースキャスター　千葉市　佐藤　綾子

AIの自動音声聞くときは感情抑へ寒々と聞く　つくば市　小林　浦波

米川千嘉子　選

「あめやんだよ」嬉々として幼の声あがる「ママはやく、ケイタイいらないよ」　春日市　林田　久子

〈評〉幼子は早く外に出たい。「ケイタイいらないよ」が心に刺さる。スマホではなく私を見て、と言っているようでも。

四十年終えて社章を返却し上着の襟の傷だけ残る　東京　佐藤　一郎

〈評〉長く頑張った証のような社章ではなく、それを付けた「傷」が。苦い歌だ。

水張田の光を浴びて進むのは一台だけの移動図書館　枚方市　久保　哲也

夕暮れに町が滲んでゆく帰路でまたこの人を許してしまう　東京　遠野　鈴

さみしさも忙しさにも慣れてきてずっと慣れないあなたに会うこと　名古屋市　外山　雪

大物歌手が舞台で歌ひし歌をわれひとりでひとりを励ますやうに　幸手市　中村　早苗

親友をひとり挙げろと言われれば十年会ってない友の名を　松原市　たろりずむ

つなぐとはまずは家族に話すこと語り部からのバトンを受けて　長崎市　佐々木泰三

日本車の見返り大豆・トウモロコシ米の代用食にされそう　西海市　まえだいっき

余所者を受け入れて来しこの村のそを主役とし祭りの続く　香取市　嶋田　武夫

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句でふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます